

当時、僕は十六歳だった。その頃、僕は学校へ行けなくなり、毎日部屋で漫画を読んだりテレビゲームをしたりして、昼夜取り替えた日々を送っていた。退屈で鬱々とした日々だった。言わば引きこもりだった僕を外に連れ出してくれたのは、叔父さんだった。叔父さんは、母の歳の離れた弟で長く海外にいた。NPO法人で、中東の僻地に水を行き渡らせる事業に関わっていた。結局、現地の人間関係でいろいろあって日本に戻ってきた。そののだが、帰国したばかりの頃は、日本のテレビポに戸惑い、どうしようか悩んでいたらしい。だから、僕が高校にうまく馴染めず、行かなくなってしまうたことにシンパシーを感じてくれていたのかも。しれない。

叔父さんは2002年型のランドクルーザー・プラドに乗っていた。知人が十年以上乗っていたものを譲り受けたのだそう。ボディ、精悍な顔

偶	僕		と	だ	り	相	た			「		朝	僕	「	た	ゆ	叔	立
然	が		し	け	に	談	。僕	叔	叔	そ	僕	食	は	「	。山	う	父	ち
で	キ		か	ど	人	し	の父	父	父	う	の父	の	あ	た	の	、	さ	が
し	ャ		思	そ	生	て	にこ	さ	さ	か	にこ	後	あ	ま	中	あ	ん	迫
か	ン		っ	の	と	い	れか	ん	ん	あ	れか	だ	、	は	に	ち	は	力
な	プ		て	頃	格	た	らし	は	は	、	っ	っ	叔	キ	い	こ	キ	満
い	に		い	は	闘	ら	しい	た	に	。叔	た	。	父	ャ	る	ち	ャ	点
。	初		な	、	し	い	。	ま	っ	父	。	。	さ	ン	と	の	プ	だ
	め		か	ぶ	て	い	。	に	こ	さん			ん	が	気	山	が	っ
	て		っ	ら	いた	た	。	家	ら	は			に	好	分	に	が	た
	行		た	ぶ	のだ	叔	。	に	の	叔			そ	き	が	キ	っ	。
	っ		。	ら	と、	父	。	来	こ	父			う	だ	い	ャ	た	
	た			し	、	さん	。	て	と	は			誘	っ	い	ン	。	
	の			て	今	は	。	食	し	叔			わ	。	い	プ	。	
	ほ			る	は	思	。	事	し	父			れ	。	い	に	し	
	ん			変	は	う	。	を	て	さん			た	。	い	出	よ	
	の			な	思	。	。	し	い	な			。	。	い	か	っ	
				親	う	。	。	て	い	な			遅		い	け	ち	
				戚	。	。	。	い	っ	な			い		い	て	。	

「	辺	「	「	「	「	「	「		寝	の	乗		買		「		「	か	
こ	り	そ	帰	来	な	青	こ	起	入	振	っ	僕	い	ス	い	叔	コ	っ	僕
こ	に	れ	り	た	ん	梅	こ	き	っ	動	た	は	た	ス	い	父	ン	た	は
は	は	は	た	か	で	の	こ	る	て	が	。	叔	か	ナ	い	さ	ビ	。°	そ
？	、	無	い	っ	こ	方	は	と	し	気	ほ	っ	っ	ツ	よ	ん	ニ		の
」	ま	理	」	た	ん	か	ど	：	ま	持	ぼ	た	。°	ク	」	に	に		日
	る	だ		か	な	な	こ	山	っ	ち	寝			菓	そ	で			、
	っ	よ		ら	」	所	？	の	た	よ	て			子	う	も			徹
	き	」		さ		に	」	中	。°	く	い			が	誘	行			夜
	り			。°		い		に		て	な			切	わ	こ			で
	人			一		る		いた		い	か			れ	れ	う			テ
	の			緒		の		。°		つ	っ			て	た	よ			レ
	気			に		？				の	た			いた	」				ビ
	配			」		」				間	し			、					ゲ
	が									に	、			ド					ー
	な									か	ラ			リ					ム
	い									ぐ	ン			ン					を
	。°									っ	ク			ク					し
										す	も								て
										り									眠

た	。	る	焚	く		か	。	を		、	り	叔	「	「	え	「	「	言	「
。	や	と	き	取	叔	聞	鳥	突	僕	切	を	父	あ	は	る	と	そ	わ	友
火	が	、	火	り	父	こ	の	っ	は	っ	歩	さ	あ	？	か	に	れ	達	
が	て	丸	台	出	さん	え	声	込	ウ	た	き	ん	あ		ら	か	て	の	
上	枯	め	に	し	は	て	に	ん	イ	た	回	は		泊	な	く	る	実	
が	れ	た	枯	た	荷	き	混	だ	ン	ま	り	僕		ま	「	焚	ん	家	
り	木	新	れ	。	台	た	じ	ま	ド	ま	、	の		る		き	だ	の	
焚	の	聞	枝		か	。	っ	ま	ブ	、	薪	不		の		火	「	山	
き	パ	紙	を		ら		て	ま	レ	に	に	満		「		で		さ	
火	チ	に	交		キ		水	、	イ	な	り	顔				も		。	
が	パ	ライ	差		ャ		の	ラン	カ	り	そ	な				し		自	
始	チ	ター	す		ン		流	ク	う	う	ど				よ		由		
ま	は	で	る		プ		れ	ル	の	な	な	お				う		に	
っ	ぜ	火	よ		道		音	に	ポ	木	構	い				。		使	
た	る	を	う		具		が	も	ケ	を	い	な				夜		っ	
。	音	つ	に		を		ど	た	ッ	拾	し	し				に		て	
	が	け	積		手		こ	れ	ト	っ	に	に				な		い	
	し	た	み		際		か	て	に	た	、	、				る		い	
	始		上		よ		ら	い	両	り	辺					と		っ	
	め		げ				から	た	手							冷		て	

な	一	「	僕	「	い	僕	叔	「	「	い	「	た	は	叔	「	「	「
じ	人	そ	は	う	て	に	父	カ	カ	？	カ	。	ポ	父	ど	ど	「
物	で	う	夢	ま	い	放	さん	レ	レ	「	「	。	リ	さ	こ	こ	「
な	、	だ	中	い	ま	っ	は	ー	ー	「	「	。	タ	ん	の	か	「
の	夜	ろ	で	。	い	た	、	と	と	「	「	。	ン	下	の	ら	「
に	中	？	カ				ケ	シ	シ	「	「	ク	方	に	？	「	「
、	に	「	ッ				ト	ー	ー	「	「	を	に	沢			「
な	部		プ				ル	フ	フ	「	「	持	が	あ			「
ん	屋		ヌ				が	ー	ー	「	「	っ	あ	る			「
で	で		ー				も	ド	ド	「	「	て	、	み			「
こ	食		ド				う	ル	ル	「	「	、	小	の			「
ん	べ		を				湯	カ	カ	「	「	さ	さ	奥			「
な	て		啜				気	ッ	ッ	「	「	く	く	を			「
に	い		っ				を	プ	プ	「	「	た	た	差			「
味	る		た				立	ヌ	ヌ	「	「	め	め	し			「
が	の		。				て	ー	ー	「	「	息	息	た			「
違	と						て	ド	ド	「	「	を	を	。			「
う	お						て	ル	ル	「	「	つ	つ	僕			「
ん	ん						沸	を	を	「	「	い	い				「
だ										「	「						「

「	「	「	。	い	茶		「	「	「	た	焚	き		ら		「	ん	「	ろ
食	外	美		。	を	叔	そ	別	怖	。	き	物	山	だ	僕	う	だ	外	う
べ	で	味		板	淹	父	う	に	い		た	た	は	。	は	ん	。	で	。
る	：	し		チ	れ	さ	か	「	か		火	ち	す	僕	素	「	食		
か	「	い		ョ	て	ん	「		？		の	の	ぐ	は	直		う		
ら		「		コ	く	は			「		赤	声	に	ス	に		と		
で				を	れ	マ					い	が	真	ー	同	ど			
し				二	た	グ					火	し	っ	プ	意	ん			
よ				人	。	カ					だ	た	暗	の	し	な			
「				で	う	ッ					け	。	に	一	た	も			
				半	ち	プ					が	夜	な	滴	。	ん			
				分	の	に					僕	空	っ	ま	本	だ			
				ず	紅	テ					た	に	た	で	当	「			
				つ	茶	ィ					ち	星	。	飲	に				
				に	よ	ー					の	が	辺	み	そ				
				し	り	バ					周	出	り	干	う				
				て	香	ッ					囲	て	で	し	思				
				食	り	グ					を	い	山	た	っ				
				べ	が	の					照	た	の	。	た				
				た	強	紅					ら	し	生		か				

の	、	叔	僕	「	「	「	「	の	は			ザ		ば	「	る			「
塊	フ	父	は	気	嘘	え	立	木	な	翌		ー		い	眠	。叔	火		そ
と	ラ	さん	は	持	、	！	ち	の	か	朝		・		い	く	父	を		う
焼	イ	は	大	ち	嘘	「	シ	根	っ	、	プ			い	な	さん	ぼ		だ
い	パ	は	声	い	！		ョ	元	た	朝	ラ			「	っ	ん	ん		「
た	ン	、	で	い			ン	に	。僕	日	ド			「	た	は	や		「
。周	に	、	応	い	思		禁	小	。僕	で	を			「	は	り			「
囲	卵	ま	え	よ	い		止	便	。僕	目	指			「	僕	見			「
に	を	た	た	！	切		！	を	。僕	を	差			「	に	て			「
い	四	火	。僕	「	り		「	し	。僕	覚	し			「	毛	い			「
い	つ	を	。僕		し			ろ	。僕	ます	た			「	布	る			「
句	割	起	。僕		ろ			。外	。僕	と	。僕			「	を	と			「
い	り	こ	。僕		。外			です	。僕	、	。僕			「	貸	、			「
が	入	した	。僕		。外			ると	。僕	叔	。僕			「	し	だ			「
流	れ	。僕	。僕		。外			と	。僕	父	。僕			「	て	ん			「
れ	、	それ	。僕		。外			と	。僕	さん	。僕			「	く	だ			「
た	ベ	から	。僕		。外			と	。僕	の	。僕			「	れ	ん			「
。焼	ー		。僕		。外			と	。僕	姿	。僕			「	な	眠			「
	コ		。僕		。外			と	。僕		。僕			「	く	く			「
	ン		。僕		。外			と	。僕		。僕			「	な	な			「

作られた。なぜか目玉焼きですら叔父さんが作  
叔父さんは簡単に美味しい料理をいくつも  
は自然の中で何をすべきかを学んだ。  
方、食事の作り方、火の始末のやり方：。僕  
の張り方、焚き木の切り方、焚き火の起こし  
叔父さんは僕に色々教えてくれた。テント  
た。  
ルは乗り心地も良かったが、居心地も良かった  
ンプに行くようになった。叔父さんのランク  
それから時々、僕は叔父さんについてキャ  
のを僕はまだ知らない。  
「うん」  
「卵にパラパラ少し振るといい」  
なボトルに入った岩塩を渡された。  
と、叔父さんが皿に取り分けてくれた。小さ  
僕のお腹が鳴った。卵が半熟に焼き上がる  
ストにした。  
き網の周囲に食パンを並べ、こんがりト

ると美味しいのだ。  
「味付けは塩と、この空気だ」と叔父さん  
は言った。  
だから、違う場所で作れば、違う味の目玉  
焼きになるらしい。  
いつも、ランクルの傍で焚き火をした。焚  
き火の炎は、僕を柔らかい気持ちにしてくれ  
る。僕は学校のこと、将来の不安のこと。好  
きな子のこと。読んだ本のこと。はまってい  
るゲームのこと。色々話すようになった。  
誰かと話すことが久しぶりだったから止ま  
らなかつた。叔父さんは、いつも黙って適当  
に相槌を打ちながら聞いてくれた。  
翌春。僕は東京を離れ、バンコクに行くこ  
とになった。父が転勤になったのだ。  
バンコクはエネルギーがあつて、初めは馴  
染めなかつたが、すぐに好きになつた。僕は  
、バンコク市内にある日系のインターナシヨ  
ナルスクーールに編入することになつた。そこ

叔父さんが、肺癌であっけなく死んだ。若  
だ  
た  
に  
あ  
「  
た  
き  
僕  
。  
た  
あ  
に  
あ  
に  
は  
、  
い  
ろ  
ん  
な  
タ  
イ  
プ  
の  
高  
校  
生  
が  
い  
て  
刺  
激  
も  
あ  
っ  
た  
し  
、  
日  
本  
で  
の  
こ  
と  
を  
一  
旦  
チ  
ャ  
ラ  
に  
で  
き  
た  
。  
僕  
は  
狭  
い  
世  
界  
の  
住  
人  
だ  
っ  
た  
こ  
と  
を  
知  
っ  
た  
。  
僕  
が  
バ  
ン  
コ  
ク  
に  
残  
っ  
て  
、  
こ  
っ  
ち  
の  
大  
学  
に  
行  
き  
た  
い  
と  
両  
親  
に  
言  
っ  
た  
時  
、  
父  
は  
賛  
成  
し  
て  
く  
れ  
た  
。  
確  
か  
に  
、  
こ  
れ  
か  
ら  
は  
ア  
ジ  
ア  
だ  
よ  
な  
。  
活  
気  
が  
あ  
る  
。  
昔  
の  
日  
本  
み  
た  
い  
だ  
よ  
。  
お  
前  
の  
思  
う  
よ  
う  
に  
し  
た  
ら  
い  
い  
」  
父  
は  
任  
期  
を  
終  
え  
る  
と  
、  
母  
と  
共  
に  
日  
本  
へ  
帰  
っ  
た  
。  
さ  
ら  
に  
数  
年  
が  
過  
ぎ  
た  
。  
僕  
は  
大  
学  
四  
年  
生  
に  
な  
っ  
た  
。  
僕  
は  
バ  
ン  
コ  
ク  
大  
学  
で  
知  
り  
合  
っ  
た  
仲  
間  
や  
若  
手  
の  
起  
業  
家  
た  
ち  
と  
起  
業  
す  
る  
計  
画  
を  
立  
て  
て  
い  
た  
。  
日  
本  
か  
ら  
計  
報  
が  
入  
っ  
た  
の  
は  
、  
ち  
よ  
う  
ど  
そ  
の  
頃  
だ  
っ  
た  
。  
。

「そうね。これ、あの子からの遺言。まあ、  
「僕は：叔父さんのことがとても好きでした  
て言つて」  
いたのよ。若い頃の自分とても似ているっ  
「あの子は、あなたのこと、とても心配して  
の母方のお婆ちゃんだ。  
傍に叔父さんのお母さんがきた。つまり僕  
て上つていくのを僕はひとりで見っていた。  
火葬場の片隅で、叔父さんが空に煙になっ  
パラパラと振つて口に入れた。  
トは素晴らしく美味しかった。試しに岩塩を  
葬儀で振る舞われた叔父さんの作ったトマ  
たものらしい。  
のハウス栽培だ。南米のアンデス流を再現し  
とを知った。原種に近い野性味溢れるトマト  
。 葬式で、叔父さんが最近農業をしていたこ  
か。 った分、癌の進行がとても早かったそうだ

、そんなオーバーなものじゃないけどー  
お婆ちゃんは、僕におじさんからメモを  
渡した。病院のベッドで書いたらしい。  
『遺言！俺のランクルはお前に譲る。俺の  
分まで乗ってくれ。そして、自然の中に連れ  
出してやってくれ。まだまだメンテすれば元  
気なはずさ』  
僕は手紙を握りしめ、その場に崩れ落ちて、  
泣いた。  
叔父さんが死んで二年が過ぎた。僕は日本  
に帰ってきた。  
僕はいまも叔父さんのランクルに乗ってい  
る。走行距離は25万キロをとくに超えて  
いる。だけど、元気だ。エンジンにはオーバ  
ーホールしてある。タイミングベルトもこの前  
交換したばかりだ。他の消耗部品もマメに交  
換している。  
僕は今、九州の大分県に住んでいる。オー  
バーに言え、ここにいて世界で仕事をして

いる。アジアのいろんな国ではコーヒー豆を栽培  
している。例えば、ベトナム、インドネシア  
、インド。それぞれの農園と直に取引して、  
豆を輸入している。  
大学の友人やバンコクの起業家と会社を起  
こしたのだ。僕は日本で販路を開拓し、そし  
て少量だが焙煎もする。今は九州エリアを開  
拓中だ。もちろん、まだまだスモール・ビジ  
ネスだけど。それでいい。  
僕は時々キャンプに出かける。今回は湖の  
そばにあるオートキャンプ場に来た。相変わ  
らず平日は空いているキャンプ場だ。でもす  
ごく居心地がいい。  
焚き火をしながら、自分で焙煎した珈琲を  
淹れる。深煎りのコクと苦味があるものが僕  
の好みだ。挽き立ての粉に熱い湯を落とすと  
、いい香りが辺りに漂う。  
珈琲の香りに誘われたのか、一人のキャン  
パーが挨拶にやっってきた。背が高く細身の華

ん	「	を	始	山		。	女		た	彼	「	「	「	「	の	奢
で	と	焚	め	登			の		。	女	じ	え	え	い	ト	な
す	こ	火	た	り			焼			は	ゃ	え	い	レ	女	
ね	ろ	の	ら	が			いた			そ	あ	い	い	ッ	の	
「	で	火	し	が			た			う	私	い	い	キ	子	
	、	が	い	赤			パ			言	、	い	い	ン	だ	
	す	赤	い	く			ウ			っ	パ	い	い	グ	っ	
	ご	な	。	な			ン			て	ウ	い	い	シ	た	
	く	な	。	う			ド			自	ン	い	い	ユ	。	
	古	っ	。	だ			ケ			分	ド	い	い	ー	シ	
	い	た		。			ー			の	ケ	い	い	ズ	ョ	
	ラ	。		最			キ			テ	ー	あ	い	を	ー	
	ン			近			も			ン	キ	り	い	履	ト	
	ク			ソ			と			ト	持	ま	い	い	カ	
	ル			ロ			て			に	っ	す	て	て	ッ	
	に			キ			も			走	て	か	い	い	ト	
	乗			ャ			美			っ	き	ら	る	。	で	
	っ			ン			味			て	ま	「			軽	
	て			プ			し			行	す				装	
	る			も			い			っ	「				備	

「ええええ…大切な人から譲り受けたんですよ」  
「へえええ。なんか物語がありそう。どんなです？」  
「ちよつと長くなるかもしれないが、いいですか？」  
僕は笑顔で言った。  
「ぜひぜひ。夜は長いですから」  
彼女は珈琲を一口飲んでから笑った。すごく自然な笑顔だった。  
焚き火の火は、誰かに何かを話したくなる。そうだったね、叔父さん。僕は、ランクルに目をやる。  
ボディは、叔父さんが作っていたトマトのよう。真っ赤にオール・ペイントした。ルーフトップは白だ。バンパーをアルミ製の物に換えた。それで顔つきが一段とクールになった。  
「きつと、叔父さんもそう言う。」